

瑚龍院祥尚（前 ほあけぼのちいあ） の 「つれづれのまま」 たわごと

「母」

「瑚龍院祥尚」は前にも書いたが新しくした独りよがりのペンネームであり戒名でもある。

「瑚龍」は炬燵(コタツ)の当て字。コタツは臆面もなくいえば1957年(昭和52年)に小生と皆で開発して翌年に開花した一世一代の代表ヒット商品であり図のように翌年朝日新聞の人気連載4コママンガにサトウサンペイさんが時代の世評として描いてくれた。当時本社の宣伝部では5,000万円の広告価値と評価してくれた。その年度、fこれもあり売り上げ60億円・利益は8,5億円を記録した。社内外の表彰も多くいただいた。

前のペンネーム(ほあけぼのちいあ)の最終回は「花」であった。中でも「願わざれども 花は咲き願へども花は散る」は折にふれよく思い出させる。

新ペンネーム(瑚龍院祥尚)の最初は同じ“は行”の「母」をご紹介させていただく。

母と海・・・海よ、日本で使う文字では、お前の中に母がいる、そして 母よ、フランス人の言葉では、あなたの中に海がある。

< 母 La me're 海 La mer >

母・・・十億の人に十億の母あれど わが母にまする母あらめやも(昵鳶敏 下呂温泉 温泉禅寺)

母の死・・・母は、'70-1-16:19:55に自宅で亡くなった。自分は、悲しいかな臨終に間に合わなかった。その時の母の言葉を後から姉や兄から聞いた。兄(長兄)が、勤めから帰ってくるのをかなりの時間待っていて、「お世話になりました。ありがとう」「私が死んだら、そこの筆筒の引き出しに、白い着物がある、それを着せてるように」と。それで目を閉じたと。死に装束を自ら準備していた。

これまで自分のこととか身内のことは恥かしくて書かなかったが今回はどうしたことか書いてしまった。

